

次期「あいち文化芸術振興計画（仮称）」策定に係る第1回有識者会議 開催結果

<開催概要>

1 日時

2022年6月30日（木）午後2時から午後4時まで

2 場所

愛知県自治センター 4階 大会議室

3 出席者（五十音順、敬称略）

荒木 由香里	現代美術家
井本 仁	半田市立成岩中学校長
梶田 美香	名古屋芸術大学芸術学部芸術学科教授
片山 泰輔	静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科教授
高北 幸矢	愛知芸術文化協会理事長、清須市はるひ美術館館長
田境 志保	豊田市美術館副館長
寺尾 晶子	中日新聞事業局文化事業部長
戸山 俊樹	愛知県立芸術大学学長
長井 千春	愛知県立芸術大学美術学部長
西川 千雅	日本舞踊西川流四世家元
西澤 泰彦	名古屋大学大学院環境学研究科教授
村田 眞宏	豊田市博物館準備室参与、元愛知県美術館館長
吉野 さつき	愛知大学文学部人文社会学科教授

<次第>

1 開会

- (1) あいさつ
県民文化局文化部長
- (2) 委員紹介

2 議題

次期「あいち文化芸術振興計画（仮称）」の策定について

3 閉会

<主な意見>

1 文化芸術の重要性について

- ・文化芸術を創造し、享受することができる権利については、「世界人権宣言」第27条において謳われ、その後「文化芸術基本法」や「愛知県文化芸術振興条例」の中でも明文化されており、それを保障するのは大切なことだ。文化権の保障は、人々が自分の価値観やライフスタイルなどを自己認識し、それを表現し、さらに、他者とも共存できることがとても大切である。文化芸術を趣味として楽しむだけでなく、それを職業としている人の活動が持続できるかということがとても重要である。また、マイノリティであっても、その人たちの表現は守られ、保障することは重要である。
- ・文化芸術は不要不急ではなく、社会形成上欠かせない要素の一つであり、いわば社会の基盤であるときちんと明記してはどうか。
- ・芸術についてはたくさん記載があるが、文化についての記載が少ない。発信者と鑑賞者という二方向に限らない文化そのものについてどうしていくかが表に出ていない。

2 現計画の評価・検証について

- ・現計画の評価・検証が次へのステップにつながっていくため、その内容を計画の前半に掲載することで、次期計画の目指す姿が見えるのではないかと。

3 コロナ禍の取組とそれを踏まえた方向性について

- ・コロナ禍で、全国各地で多数の文化施設が閉められる中で、愛知県は、いち早く「文化施設は閉めない」ということを声高に言い、開け続けたということが、他県にとっても良い例となった。
- ・また、展覧会の延期や中止が多くあったが、愛知県では文化芸術に対する支援策が講じられたため、アーティストにとっては、他の地域に比べて堪える力があつたと感じた。
- ・新型コロナウイルスの影響を受けたことで、改めて、すべての県民に対して、文化芸術に関わることができる環境の整備が重要であると認識したことを重要な位置づけとして記載すべきで、それにより次期計画の意義も明確になっていくと思う。

4 基本課題と個別取組について

(1) 教育環境の変化とその対応について

- ・教員の働き方改革による部活動の地域移管が進められている。部活動の地域移管は、地域に受け皿が必要だが、芸術関係の指導者は少なく、習い事となると、家庭の経済格差が生じることから、指導者を育成するための取組が必要だと感じる。
- ・学習指導要領により芸術科目の授業時間数が減っている。学校においては、主要5科目と比較すると芸術科目の扱いは低く、そういった根幹のところの問題があると感じる。
- ・学校現場では、一人一台タブレットが配備されているため、デジタル画像の公開やオンラインの活用などに期待を感じる。

(2) 障害者の文化芸術活動の推進について

- ・高齢者・障害者の施策を見ると、余暇的な参加、趣味的な参加にとどまっているため、障害の有無にかかわらず担い手として、どのように支援していくかを考える必要がある。また、今後は、ユニバーサルな視点を意識した取組が必要だと感じる。

(3) 人材育成について

- ・文化芸術の担い手と支え手について、具体的に示す必要のではないかと。
- ・文化芸術の担い手のみならず、アートマネジメント系の人材育成など、各分野での支え手の人材育成の必要性を加えたほうが良い。
- ・人材育成は重要な取組だが、この地域で活躍の場を提供できると良いと感じる。
- ・担い手や受け手側などに対する広報が大切である。様々な人たちに広報し、興味を抱いてもらい、そこから別の新たなものの見方が生まれるような計画となると良い。

(4) 地域力の向上について

- ・県が、基礎自治体が行っている取組の評価や検証を行わないと、真の意味で、地域力につながっていかない。基礎自治体と県が同じ方向を向いていて、うまく連携できると、効果が生まれてくると感じる。

- ・愛知県は規模が大きな自治体のため、県がフルメニューを揃えるのではなく、基礎自治体がそれぞれ文化芸術振興に取り組み、基礎自治体ではやれないことを県が補うという補完性の原則に立って、進めていくべきではないか。例えば、基礎自治体の計画策定の支援に力を入れるなど、基礎自治体をしっかりさせてこそ強い愛知だと思う。

(5) 地域の文化資源や伝統芸能・文化財等について

- ・地域で暮らす人々に芸術を授けてあげる、経験させてあげるという上からの目線ではなくて、その人たちが長年生きて、形作ってきた文化というものに光を当てることが一番大事ではないか。
- ・伝統芸能や文化財等について、危機的な状況であるならば、危機に対する緊急対応のようなアクションや踏み込んだ取組が必要だ。

(6) 連携について

- ・ジブリパークと県芸大メディア映像専攻と次期計画の関連性など、それがどう活かされていくか、色々な分野と連携しながら考えていけたら良いと思う。
- ・今の文化芸術の危機的な状況を脱するためにも、ビジネス界とアート界の融合など、新たなものを生み出せるようなことを次期計画に盛り込むことができると良いのではないか。

5 数値目標等について

- ・評価については、数値に表れない部分が重要だと感じる。
- ・次期計画の評価指標を出すときに、数値的なものだけではなく、ほかのモデルも参考にしながら、多様な評価の仕方というのを検討すると良いと思う。
- ・計画を策定し、伝えて、理解を深めていくことに加え、計画から生まれる課題の解決をきちんと図っていかねばいけない。